大イチョウが動く

ある日、南の飯豊山から強烈な光とごう音と共に、数多くの石が飛んできて、松林の中に落下した。松の葉が生い茂り、ふだんは薄暗い松林だが、石が落ちてきたあたりは真昼の日光が照らしつけるように明るい。そして、夜になっても光は衰えず、ますます明るくなっている。近くに住む男たちがおそるおそる近づいてみると、光っているのは仏像だった。まわりに散らばっている石も、仏像の半分ぐらいの明るさで光輝いている。男たちはその仏像と光る石を集めて、鎮守の社の中に飾った。その仏の力があったのか、このあたりには人々が集まるようになり、市野々部落ができたという伝説がある。

黒沢峠を越えたバード達は、トボトボとこの市野々へと向かっている。バードを載せた

牝牛がぴたりと足をとめて、動かなくなった。

「どうしたんだい？イトー」

問いかけられたイトーが案内人に分けを尋ねている。

「目の前を大きな川が流れいます」

「それはわかるよ、暗いけど流れの音が聞こえて来るもの」

「牛は、川にかかった橋を渡るのを嫌がっているのです。馬も牛もみんな嫌がるのだそうです」

「そうか、人間の作ったものはそこまでは信じられないということね。わかったわ」

そういうと、バードは牛の背中からひらりと飛び下りた。

「いたたた！」

顔を歪めるバードを見て、あわてたイトーが声をかけた
「どうしましたか！足でもけがしましたか？」
「いや、足ではなく、背中。持病が出てきたみたい」
バードは背中に脊椎カリエスという病気をかかえている。そもそも、この持病を直すための転地療養として保養地への旅行を始めたバードだったが、それが病みつきとなった未開の血を歩くようになっていた。
「大丈夫よ、これぐらい」
そういうとバードは、牛を引いて橋をわたっていく。川をわたると茅葺屋根の家が見えてきた。右の方に目をやると、大きな木の下で、焚火をしているのが見える。
「イトー、あの大きな木は何の木だろう」
「ああ、あそこはたぶんお寺です。お寺には火事に備えて燃えにくい木、イチョウが植えられるのが普通ですが、聞いてみますね」
イトーは案内人に聞いた。
「やっぱりイチョウだそうです。飛泉寺という古いお寺の大イチョウです。若者達が木の下で、一杯やっているようです」

一軒の農家についた。岩船屋という旅館をかねている。窓の障子からはろうそくの明かりに照らされた影がゆらゆらと浮かび上がって動いている。そして中からは、バードがどうしても慣れない三味線の音が聞こえている。バードとイトーは、一番奥の部屋に通された。

「イトー、何でもいいから私先に横にならせて」
再び顔を歪めたバード、脊椎の痛みがひどいらしい。

二つしかない大部屋ので、２人はつい立てを隔てて眠ることになった。
横になると、バードは唸りだした。
「痛いよー、OH! OUCH!」
イトーにはなすすべがなかった。
「大丈夫ですか？もうこんな旅はやめませんか？」
「何言ってるのよ。せっかくここまで来て、引換すわけにはいかないわ！」
「でも痛い。痛いよー」
３０分ほど、うなっただろうか、バードは眠りに落ちた。

夜が深まるとともに雨足が強くなってきた。外が急に騒がしくなった。
「大水がでるぞー！みんな高いところへ逃げろ！」
ほら貝の響きと共に危険を知らせる声が岩船屋にも響いた。宿屋の者の先導で
大雨の中、２人は山の方へと登っていく。

道の途中、「よいしょ、よいしょ！」という掛け声が聞こえた。そして何十人もの人々達が、大きな縄を引っ張っている。よくみると、縄の先にはイチョウの木がつながっている。

「あの人たち何をしているのイトー」

「大イチョウが大水で流されないように、山の上に動かしているのだそうです」

「うそでしょ？あんな大きな木が動かせるわけないでしょう！」

夜が明けた。大イチョウは大きな池のほとりにその大きな姿を現した。村だったところは、水に飲まれ、岩船屋はわずかにその屋根をのぞかせている。

バードが見た夢だった。